

編集室から

突発的な事情により、今月号の発行が1週間ほど遅れてしまいました。楽しみにお待ち頂いている方々に、お詫び申し上げます。

さて、人はみな、自分の価値観で優先順位を決めています。処が、驚くべき事に、当人にとって重要なはずのことが時として後回しにされることがあります。端的なのは、健康。

誰しも、健康で居たいという願いをしているはずですが、にも関わらず、日々の暮らしの中では、必ずしも健康を最優先する選択肢が取られているとは限りません。

健康保険が個人の任意となっている米国では、健康に関する意識が返って高レベルです。中でも日々摂取する栄養が健康に直結していることは、中産階級以上の方なら常識化しているようです。身体は、毎日取っている食事で作られているのですから、当然です。古くは医食同源とあるように、東洋の知恵だったものが、今では最新の科学を用いた栄養学が、米国で最高レベルの健康(オプティマムヘルス)への礎と進化しているのが、なんとも皮肉です。

一方、国家的に護られている日本の健康保険制度では、ほとんどが医療に頼りきりです。そればかりか、健康への重大事が、後回しになっている人が少なからずいます。先日、かつて地域づくりで大活躍していた方が、60歳を目前に急逝されました。癌は手術で克服されたものの、内臓の一部が欠損し、免疫不全のリスクがあったそうで、しばらく落ち着いていたものの体調が急変したそうです。免疫はアミノ酸をバランスよく十二分に摂取することで、強化可能だけに、残念でなりません。

健康はお金では買えないと言いますが、実は栄養学を介せば、ある程度はお金で解決できます。「無知=リスク」である時代が既に到来しつつあるようで、複雑な思いです。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆
していただいている川畠さん
が「能登の夜市」の姉妹店を
開店されました。

上京された際、ご利用になっ
てみてください。

もちろん、川畠さんご自身も
お店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマン
ション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術
者を育てることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、
計画マンがどのようなことを考えているのか
などに触れて、少しでも業界を知っていただ
ければと考えて編集しています。

2013/12

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

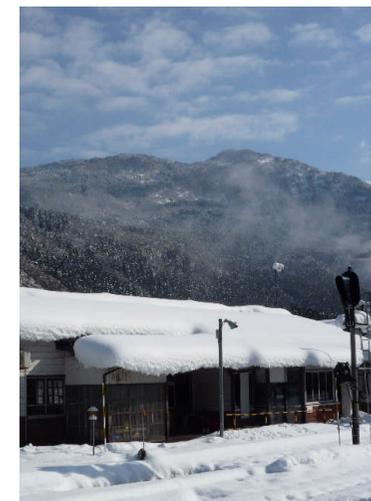
Email usric@neting.or.jp

2013/12

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

師 走



高山本線猪谷駅にて
by hama

濱のつばやき 『基準値』

他人には厳しく、自分には甘い。これは凡人。自分に厳しく、他人に甘い人は、偉人である。長く、どうしたら、自分には厳しくとも、他人には同じ厳しさを求めない人になれるのか、自問してきた。だが、答えはなかなか見出せないでいた。

気を緩めると、自分に甘くなる。そのままウツカリ生きていくと、他人にも甘くなった場合、一見仏様のような人物に見えるかもしれないが、中身は別物だ。

世間には色々な人がいる。自分はできていないくせに、他人には高度なことを要求する人が増えた。どっぷりと消費者根性に浸かったような御仁。自分は弱者であり、優遇されて当然という高圧的な態度を示す人。これらの人は、自分に甘く、他人に厳しい典型的凡人。無自覚な故に、周囲の迷惑すら感じられないかも知れない。

自分に厳しいと、つい人にも同じ要求を突きつけてしまつて厳しくしてしまいがちだ。ところが、これだと人望は集まらないのだらう。

自他を観察するにつけ、自分にだけ厳しく、万人に優しい眼差しと態度で望み続けられる人の何と少なく、そしてそうある事の難しいかを知らされてきたような気がする。

NPO創世記の頃、その世界に飛び込んで驚いたことがある。今までご縁があつた人々とはまるで異質・異色の方々ばかりだった。そして、気付いた事がある。今までなんと狭い世間で生きていたのだらうかと。

縦割りなのは、何も行政組織ばかりではない。市民の活動領域も、行政と遜色ないほど縦割りになっている。そして、異なる「業界」「同士は利害関係で衝突し、世論が割れる。

かつて、都市住民と言えども何らかのものづくりに関わっていた。曰く童謡の歌詞「母さんが夜なべをして手袋編んでくれた。」消費者と言えども生産者の苦勞・思いは無言で汲み取っていたと思う。

しかし今、両者の間の溝は深い。スーパーで惣菜を求めれば、料理さえもしなくて済む。少し前の暮らしからすれば、貴族のような暮らしともいえるほど、手を掛けなくても過ごせるようになっていく。わずか数十年だが、隔世の感がある。そして、消費者は、作り手の思いが判らなくなった。便利な世の中になる事は、それ自体は良いことであらう。だが、体験することが減ると、さまざまな立場の人々の心・思い・感情に思いを馳せる

事、つまり「思いやり」ができなくなるようだ。必然、してもらつた事に対する感謝の念も湧くはずがない。この状態で、果たして幸せといえるのだろうか。

基準値という言葉を最近、良く耳にする。

身体に支障がなければ、両足で歩くことは無意識でできる。呼吸も然り。当たり前に行ける事に意識は向かない。ところが、病氣や怪我をして呼吸や歩行が難しくなると、自然にできていたことが如何に当たり前ではないことなのか、気付かされる。

オリンピック選手の力量は、凡人とは比較にならない。我々には到底できそうにないジャンプや技ができて当然という基準値を持っている。高い基準値を当たり前のごとくクリアするために、日々心身のトレーニングに、淡々と臨むことができる。

彼らはしかし、己の基準値を他人に求めることはない。基準値をクリアするために求められることは、自分にだけ向けられているのであって、他人には適用されない。ここにヒントが隠されていた。自分にだけ厳しく、他人にはそれを求めない生き方。それは、この基準値の考え方を取り入れれば、より身近になるのではあるまいか。

「人望・人徳のあるリーダーにならう・目指そう」とすると、そうはなれない。人望・人徳は結果として現れるもので、目指して取得できる資格とは本質が異なる。真のリーダーは、己の姿を見せて、それのみを指針に続く人々を感化する。己に課した基準値は、己のみのものであり、他人に強いる必要がない。

「覚悟の磨き方」という書籍が出た。「時代のすべての異端児たちへ」と、記されている。

内外に大変革を向かえ、あるいは迎えたつある今日。その変化・変革を、肌身を以って感じていくのは、中心で護られてぬくぬくとしている人々ではなく、縁辺部でさまざま

な「際」に接している人であらう。世は常にその人の事を「異端」と呼ぶ。だが、異端の中こそ、変革の後いつしか先頭を走っている者が現れる。

同書は、江戸時代あまりの異端ぶりに処刑された吉田松陰の語録百七十六編を心・士・志・知・友・死の六章に組みなおしたものだ。「超訳」とあるように、一頁に一編、簡潔さが逆に染みてくる。

己の基準値を高く掲げるに、良書だ。



きただより61 弘前大学地域社会研究会 上村 康之 『東北新幹線青森開業後の地域状況(2)』

東北新幹線青森開業からこの12月ではや3年になる。開業から日も浅い2011年3月の東日本大震災の影響により開業効果も十分に受けたといえないなか、目の前には15年度中の北海道新幹線函館開業が迫ってきている。不定期シリーズ「東北新幹線青森開業後の地域状況」の第2回は、新青森駅周辺の土地利用とコンパクトシティについてとりあげる。

現在の新幹線終着駅である新青森駅。1986年11月、青森駅から西に約4kmに位置する奥羽本線の駅として将来の新幹線停車駅を見込んだ開業であった。当時の駅周辺は国道7号と県道鶴ヶ坂千刈線(旧国道7号)に挟まれ、スプロール化が進行しながらも農地や林地が広範に分布していた。度重なる新幹線建設計画の延期から、都市計画が著しく遅れていった。このため、新青森駅周辺整備である石江地区土地区画整理事業は、駅開設から15年が経過した2001年度に都市計画決定、2003年度に工事着手となった。青森市はコンパクトシティの理念に基づき、新青森駅周辺地域は中心市街地と競合しない程度の観光、商業、宿泊、公共公益のための土地利用という方針を打ち出し、地区計画により高さ制限や店舗面積等の制限をかけてきた。

経済情勢等もあってこの制限の影響のみが原因といえないが、18区画の商業用地(保留地)のうち売却されたのは、レンタカーとオフィスビルの2区画のみで16区画が売れ残ったままになっており、この空き地状態に議会や市民等からも度々批判の声が出ていた。青森市は2011年に商業施設等の開設に対する補助金制度、翌年には幹線事業者に対する支援制度などを設け土地の販売に努めてきたが、目に見えた成果があがっていなかった。

そこで青森市では、この10月に「保留地」の建築規制を緩和する方針を打ち出した。これまで16区画中10区画にかけられていた20mまでの高さ制限は、道路からの後退距離に応じて20m以上の建築物を建設できるように修正し、店舗面積は3,000㎡から1万㎡に拡大した。このため店舗面積だけみると、衣料や住関連の専門スーパー等の出店ハードルが低下したといえる。ただ、新青森駅周辺地域の北側を国道7号が東西に貫通し、複合型SCのガーラタウン(店舗面積、約33,000㎡)ほか20年以上かけてロードサイドショップ街が形成されたなか、新青森駅前に商業施設の出店余地があるのかどうか。また、青森市は市民センター等の配置が一段落しており、公共公益施設の立地も現実的でない。

コンパクトシティの理念を下すには至らないが、堅持してきた方針を転換したような形になった。新青森駅前に諸機能が張り付いていくのか、今後の展開を注視したい。

青森市のコンパクトシティ構想は、富山市と並んで成功事例として紹介されてきたが、2009年に青森駅前の複合ビル「アウガ」の債務超過が発覚以来、すっかり雲行きが変わってしまった。残念ながら、NHK総合テレビ「クローズアップ現代」の「わが町を身の丈に～人口減少時代の都市再編～」(10月21日放送)では、青森市のコンパクトシティは行政主導が限界にきていると放送された。青森市がコンパクトシティを「都市計画マスタープラン」に掲げ15年が経過するが、人口減少時代の地方都市の未来を見据えた都市政策の方向、挑戦として決して間違った選択ではなかった。事態の好転を願わずにはいられない。

参考資料「高さ制限緩和の方針～新青森駅周辺保留地 市、地権者に原案提示」2013.10.22 東奥日報朝刊

『能登で講演してきました』 株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

11月20日(水)に能登で講演をしてきました。タイトルは『能登を発信する料理居酒屋「能登の夜市」から見る東京のお客さま』です。北陸新幹線の開通も約1年後に控え、関東圏からいらっしゃるであろう多くの観光客に対してどうビジネスしていくか、という事が根底にあります。

それでは私がお話ししたポイントをかいつまんで。

【東京の消費者の特徴】

- (1)日本中の美味しいものを知っている
- (2)価値に見合わないものにはシビア
- (3)食に対する知識量もあり要望も多い
- (4)背景(ブランド・ストーリー性・製造法)が確かなものには納得してお金を出す
- (5)ひとつでも何か気に食わないと二度と利用しない
- (6)情報発信力・受信力ともに高い

というのが私が商売をしていく中で感じる事です。フェイスブックやツイッターなどで情報が短時間に多くの人に発信されるので“気を抜けない”商売相手ですが、数多ある飲食店の中で選んでいただければ、それととてもいい関係を築くことができる相手でもあります。

『そんな東京の観光客相手に能登の方が商売をするには?』という事に関しては、それがまず前提であることにやや疑問を抱きます。その理由としては、

まず地元で愛される店作りを優先すべき

旅行とはその人にとっての非日常であり、その地域の日常を垣間見たり、参加したりする行為であるとも定義できます。

つまり、その店が地域の日常を映し出しているのか?また地域に根付いているか?もっと言えば地元の人に愛されているかどうか人が集める一番のファクターです。

能登というだけで勝てるほど甘くはない

ターゲット設定は“東京からの観光客”というくくりという甘さ、また個々の企業、お店の持つ経営資源がはたして、国内の他の観光地、または海外の観光地が持つ経営資源と比較して競争力があるのか?ということです。

特に近年能登だけではなく、日本各地『何でもある現象』が横行している気がします。日本酒もある、焼酎もある、ワインもある、魚もある、肉もある、うちの県には何でもあります。という奴です。“何でもあるは何もないと同じ”と私は考えます。

香川県のうどん県ではないですが、これしかないけど、自信をもって世界一と言えるものは何でしょうか?

このような話をしたためか、特効薬を望む参加者のニーズに合致しなかったようで、これといった盛り上がりもなく終わりました。僕も自分の経営資源を生かすための話術磨こう。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

ななつ星の旅(その2) 静岡県職員 溝口 久

我部屋は603号室、6両目の三番目の部屋だ。車両は8両ある。

1号車は正面が全面ガラスのラウンジカー「ブルームーン」、2号車がダイニングカー「木星」で、ここに厨房がある。

3号車から7号車が客室で、一車両に三室のスイートルーム、7号車のみ二室のデラックススイートになっている。

各客室には寝るときにベッドになるソファ、デスクが備え付けられている。

内装は赤みのかかった木肌の美しいカリンが使用され、水回りにもふんだんに木が使われている。お湯を出すと檜の香りで満たされるシャワールーム、蓋が木製のトイレ、そして人間国宝・14代酒井田柿右衛門氏の七角形の洗面鉢が収められた洗面台がある。

デスク下に組み込まれた冷蔵庫には飲み物が入れている。我らを世話してくれる原尻さんに、すかさず「ビールは？」と訊くとプレミアムモルツの瓶を取り出してくれた。飲み物は全て無料、ただしアルコールドリンクの追加分は有料とのことだった。

列車内でラウンジに行けば、いつでも飲み物は提供され、アルコールは有料、他は無料となっていた。

窓に付く建具はプリーツ状のカーテン、障子、簾、木戸の4重になっている。

車窓に目をやれば、沿線には「ななつ星」に向かって手を振ってくれている人々がいる。

これまでも試験運転で走る姿を見ていただろうにと思ったのだが、その時は窓の内側の戸は閉ざされ、中は一切見えない状態であり物足りなかったようだ。

戸、障子、カーテンが開かれて、室内に白熱色のランプの明かりに照らされた旅客の姿が見えることで「ななつ星」が完成する。

初走りの姿を記憶に止めようと多くの人たちが沿線に立ち、しかもこちらに向けて手を目一杯振ってくれている。

「ななつ星」が手を振って返すわけには行かないから、付属品たる我々がその任を果たさなくてはと両手を振って全身で歓迎の手振りにお返しをした。これが「ななつ星」に乗っていることの最も大きな喜びとなった。

きっと、これからあとの便でもきっと九州の方々は手を振ってくれるのだ



う。

ただ、ファースト便はその人の数も振る角度もきっと大きいに違いないと思いつつ、有名人にでもなったような錯覚に陥りながら、皆に手を振り返していた。

中には、こちらを見ているだけの人もいる。でも、その人に顔を向け手を振ると顔が一瞬にして綻び満面の笑みで大きく手を振り返してくれる。

人から勇気ももらうとか言うけど、この手ふりの交換は喜びの交換でもあるんだな思わずにはいられなかった。

「昼食の準備が整いました」と、我らを面倒見てくれる原尻さんから案内があったので、ダイニングカー「木星」に向かった。603号室は一般スイートルームの中でダイニングカーからは最も遠い部屋だ。狭い通路を6・5・4・3両目と進み、2両目である「木星」にやっと着く。車両ごとに通路の内装を変えてあり、また飾られた額の絵も楽しく単調な通路ではない。



さて、ななつ星の食事はどうか、大分の豊かな味を表現する「方寸」(大分市)の河野美千代氏、"玄海発博多前寿司"を握る「やま中」(福岡市)の山中啄生氏、宮崎の郷土料理を提供する「ふるさと料理 杉の子」(宮崎市)の森松平氏らが食事を担当。車内でのデザートは、「エディション・コウジ シモムラ」(六本木)の下村浩司氏と、小生が尊敬していた今は亡き天才藤林晃司氏がつくった由布院温泉「山荘無量塔」の竹下尚武氏の2名が担当しているとのこと。「自分店を持つと考える分野で、一流と言われる人たちがどんな店づくりをしているか、それに対して自分ができるレベルはどこまでできるかを冷静に考えて勝てることをしてきた」と語った藤林さんの話が恋しい。小生が由布院で体験したことの最も素晴らしかったのは一流に出会えたことと思っている。その由布院もこの日に寄ることになる。藤林さんの手がけたアルテジオに行くことにしている。

ななつ星のミニ厨房の前には、実際に「やま中」の主の山中啄生氏が寿司を握ってくれていた。トロ、鯛、ウニ、イカ、車海老、穴子、甘鯛昆布、煮アワビときた。美味しさの表現をする十分な言葉を持ち合わせていないので、ただただひたすら美味しかったしか言うしかない。窓の外で手を振る人姿が気になり、手を振るお返しをしながら寿司を口に入れていた。ラウンジでのスイーツで空腹度が減ったことに加え気になる車窓の人の風景のせいで、唯一無二の「博多前」の寿司に集中できなかったことが少し悔やまれる。

お寿司をいただいていると、福岡、大分県境の筑後川の橋にかかってきた、その前から「ななつ星」がスピードを落とし始めた。停車するというわけではない。窓の外を見ると沈み橋の上に人また人が手を振っていた。大きな旗も、番傘も振られ大変な歓迎の様子を見せていた。(つづく)